

水泳における学校体育と社会体育の連携

森 恭*・跡 治 望 美**・大 庭 昌 昭*

暑い盛りの夏休み、子供たちはプールに、海に、あるいは川へとでかけ、涼を求め、水辺での時間を過ごす。外遊びが少なくなったと言われている現代っ子たちにとっても、夏休みの水遊びは大きな楽しみの一つであることに変わりはないであろう。大人にとっても水泳は、楽しみや健康のための生涯スポーツとしての意義のみならず、レクリエーションや野外活動の基礎としての意義を持っている。

さて、体育の題材とされるスポーツの多くは、日常生活から離れることを含んでいる。その中でも、水泳の場合には、水中という身体にかかる力と姿勢、さらには呼吸に関して日常生活からはかなり特殊な環境で運動が行われる。従って、水泳の学習は、まずそのための場所＝施設を必要とすることがわかる。そして、特殊な環境で必要とされる技能は日常生活で習得するには限界があり、水泳における技能やそれをベースとした諸活動は意図的な練習なしで、あるいは見て覚えるというモデリングのみで修得することは困難である。さらに危険の回避のためには安全を確保する指導者のもとでの練習が必須であると言える。

まとめるならば、水泳の学習にはプールや海、川などの水中環境が必要であること。水泳の学習には指導者が重要であること。特に学習初期においては、安全性のことも考慮すれば、指導者ひとりあたりの被指導者の人数を多くはできず、個人指導下もしくはひとりひとりに十分に目が届く人数の集団での学習が必須であることがいえる。

さて目を学校体育に転じると、一人の教員が30名以上の児童・生徒を指導する場面も珍しくない。このような状況で、学習指導要領(1998a, 1998b, 1999)の示す内容・段階にまで児童・生徒が到達できるであろうか。小・中・高等学校においては、多

くの学校がプールを持つに至ったものの、屋外の季節利用のみが可能なものがそのほとんどである。学校に屋内プールを建設する政策はあるものの、全ての学校に行きわたるといよりは、屋内化の一方で、むしろ古い施設の廃止後にプールを再び建設することがない学校も増えつつある。このように学校のプールのほとんどが屋外施設であるために、施設の維持にかかる経費に比して、その利用の度合いが少ないといえる。また、体育授業での水泳は夏休み期間の前後数週間で行わねばならず、多くの学年・学級が同時に利用した場合に、十分な学習活動の場と時間が得られないことも予想される。

一方、社会スポーツにおいても水泳プールの数は、1969年は14,107ヶ所、1980年は30,911ヶ所、1996年は39,981ヶ所と着実に増加し、特に屋内プールは13,511, 29,923, 35,370と約30年で約2.6倍の大幅な伸びを示している(文部省, 1996, 2003)。

社会スポーツにおけるプールにはいくつかの種類があるが、その一つは公共のプール等であり、このタイプには継続的な指導を受けることのできる指導者がいることは稀である。次にあげられるのが、レジャープールと呼ばれるもので、泳ぐというよりは水中での遊びが主な活動となる。ダイビングプールはダイビングのために、十分な深さを持ったプールであるが、安全の面、水平面への移動の距離が少ないことなどから水泳には適さない。近年多く見られるようになってきたものは、アクアビクスなどの水中運動を主な活動とした施設で、やはり水泳よりも水中での活動が中心となる。そして、最後にあげられるものがスイミングクラブとスイミングスクールである。

スイミングクラブは、国内では昭和40年に創設されたヤマダ・スイミング・クラブがその最初である

2003. 9. 1 受理

* 新潟大学教育人間科学部

**富山県立山町立芦原小学校

(日本スイミングクラブ協会, 2000)。当初のスイミングクラブは、東京オリンピックでの競泳の敗退を受け、競泳の競技力向上を目指したものであった。ほとんどのスイミングクラブが自前の屋内プールを持ち、このため、年間を通しての活動・トレーニングが可能となった。これが次第に競泳のみならず、水泳技能の習得を目指したスイミングスクールの展開をはじめた。そして現在では、短期の技能向上コースや成人のための生涯スポーツ支援のコース、リラクゼーションを中心としたコースなど多様なコースを開設しているところが多くなっている。

このように見てくると、子供たちが家庭教育以外で水泳の指導を受ける場面としては、学校体育とスイミングスクールの2つが考えられる。この両者を比較してみると、先にも述べたが、指導者一人あたりの指導対象人数は学校体育において圧倒的に多い。また指導者の水泳指導における力量としても、水泳の専門家としてのスイミングスクール指導者に比べて、教員の場合には総体的に低いことも予想される。さらに、施設の面からは、年間を通して利用可能な屋内温水プールを持つスイミングスクールが多いことに比べ、学校が屋内プールを持つことは現在ではまだ稀である。また学校体育において、水泳は必修として児童・生徒は学習活動を行うわけであるが、スイミングスクールはあくまでも社会体育として、その場での活動を望むものが、それ相応の費用を負担して参加するものである。

このように、水泳を学ぶ場としての学校体育とスイミングスクールとは、当然ながら異なった特徴が見られる。しかし、両者の連携が可能となれば、それぞれが補完しあうことができるのではないであろうか。本研究はその可能性を探るための基礎資料を提供することを目的とする。

本研究の主な内容は以下である。

1. 水泳学習の場としての、学校とスイミングスクールの施設・設備状況
2. 水泳学習に対する児童・教員の考え
この部分は、現在の学校体育における水泳授業の課題を浮き彫りにすることが目的である。
3. 学校体育との連携に関するスイミングスクールの考え

方 法

調査期間 平成14年11月21日～12月20日

調査対象 新潟市内の合計11の小学校に所属する

4・5・6年生児童合計2,167名および教員合計193名、新潟市内のスイミングスクール7団体

調査内容 児童に対しての調査内容は、水泳に対する意欲や関心、学校の水泳授業の意欲や関心、スイミングスクールの活動経験の有無である。質問項目は、「水泳授業に関する意識について」、「スイミングスクールについて」の2分野で、全部で17項目である。

教員に対しての調査内容は、「指導要領との関連について」、「水泳指導について」、「水泳指導の行い方について」の3分野それぞれ12項目からなり、全部で36項目である。

さらに、社会体育と学校体育との連携の可能性を図るために、スイミングスクールに対して、現在行っているサービス内容や、協力の可能性の有無の調査を行った。

調査用紙の配布と回収 調査用紙の配布は、平成14年11月下旬に、本研究者らが11校に直接依頼した。また、平成14年12月上旬から中旬にかけて、本研究者らが11校から直接回収した。ただし、要望があった小学校のみ、郵送し、返信用封筒にて回収した。回収数と回収率は児童2,046名(94.4%)、教員138名(71.5%)であった。

スイミングスクールに対しては、配布と回収ともに、全て郵送とし、配付したすべてのスクールから回答を得た。

結果と考察

質問項目のまとめ

分析に先立ち、多数の質問項目について、回答の相関の高いものをまとめる作業を行った。児童に対する質問項目について、「水泳授業に関する意識について」の15項目の類似した内容をまとめるために、主因子解を求めバリマックス法を施した。解釈可能な4つの因子への負荷が0.50を超える項目を合計したものを下位尺度とした(表1)。尚、因子負荷がマイナスの項目は反転して加えた。下位尺度は「水泳の楽しさ」(項目1, 3の2項目)、「水泳の向上心」(項目4, 5の2項目)、「学校の水泳授業への期待」(項目11, 14の2項目)、「学校の水泳時間の楽しさ」(項目6, 7, 9, 10, 13の5項目)である。これらの下位尺度得点は、各項目の合計点を項目数で除して求めた。また、因子分析において共通性が低く、どの因子負荷も0.50に満たなかった項目については、独立した下位尺度として扱った。「水への怖

表1 児童の水泳授業に関する意識についての項目のまとめ

番号	内 容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
1	泳ぐことは好きである	.338	.670	.205	.185	.639
2	水がこわい	-.185	-.247	-.001	-.090	.103
3	水に入るのが楽しい	.275	.629	.226	.190	.558
4	もっと水泳がうまくなりたい	.097	.336	.230	.552	.480
5	泳げるようにならなくてもいい	-.237	-.087	-.073	-.753	.636
6	学校の水泳の時間は好きである	.583	.348	.331	.201	.611
7	学校の水泳の時間はめんどろだ	-.643	-.117	-.246	-.197	.526
8	学校の水泳の時間はがんばっている	.161	.203	.310	.180	.196
9	学校の水泳の時間は楽しい	.595	.353	.385	.149	.649
10	学校の水泳の時間はきらいである	-.656	-.264	-.278	-.179	.609
11	学校の水泳の内容に満足している	.129	.024	.559	.064	.334
12	学校の水泳の時間の回数は多い	-.372	-.125	.153	-.030	.178
13	学校の水泳の時間をもっとふやしてほしい	.510	.438	.259	.102	.529
14	学校の水泳の時間で泳ぎが上達すると思う	.047	.098	.543	.179	.339
15	学校の水泳の時間でもっと遊び時間をふやしてほしい	.018	.090	.128	-.018	.025
2乗和		2.271	1.622	1.357	1.164	3.386
寄与率		0.151	0.108	0.090	0.078	0.226

※ □で囲んであるものは、絶対値が0.35以上のものである

れ」(項目2),「自己の努力」(項目8),「授業の量的評価」(項目12),「遊び要素の要望」(項目15)である。

次に教員質問項目3分野36項目についても,分野ごとに児童への調査と同様の手続きで下位尺度得点を求めた。「指導要領との関連について」は4つの下位尺度,「水泳指導について」は5つの下位尺度,「水泳指導の行い方について」は5つの下位尺度に分けられた(表2)。

水泳学習の場としての,学校とスイミングスクールの施設・設備状況

表3は小学校とスイミングスクールとの施設・設備の状況をまとめたものである。表3が示すように,屋内プールの完備状況,温水シャワー,更衣室,男女別トイレ,浮き具,救助道具等,多くの点で,水泳の場としては小学校のプールよりもスイミングスクールに,平均としてアドバンテージがあるといえよう。屋内の温水プール,温水シャワー完備であるために一年を通じて活動が可能なが最も大きな点である。その他の設備ならびに備品については比較的簡単に揃えることができるが,この2点については,容易には変更できない点でもある。これに対して,コース数については,概して小学校のプールの方が多。気候・天候などの条件を整えば,小学校のプールも非常に有用な施設であるといえる。

水泳学習に対する児童の考え

児童に対する調査には2,046名から回答を得たが,不備のあったものを除外した2,037名分について,以下の分析を行った。児童の学年,性別の内訳を示したものが表4である。学年,性別ともに大きな偏りはない。

全体の傾向を見るために,各下位尺度への回答の度数分布を図1に示した。全体の傾向として,水泳を楽しみと感じ(平均:4.13),水泳がうまくなりたいと考えている児童が多い(平均:4.14)ことがわかる。また,水への怖さ(平均:1.33)を感じている児童は比較的少数であり,自己の努力を認めている(平均:4.01)児童が多い。このような,水泳そのものに対しての前向きな姿勢に比べて,水泳授業の評価は多少異なる。まず,水泳時間は楽しい(平均:3.86)と感じ,授業回数の増加を望む声(平均:2.61)は多いものの,内容としてはより多く遊び要素を含んでほしいという希望(平均:4.34)が非常に多い。そして,水泳授業への満足度と授業による技能の上達への期待はそれほど高くない(平均:3.26)。

次に,これらの回答を学年,性別,スイミングスクール経験や通う意図による差異に基づいて一要因分散分析を行った。結果をまとめたものが表5である。

学年ごとの比較においては,水泳の楽しさや水泳に対しての向上心,水泳授業への期待や水泳授業の楽しさなどが,学年を経るにつれて減少した。この

表2 教員の水泳授業に関する意識についての項目のまとめ

表2-1 学習指導要領との関連について

番号	内 容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
1	体育の授業数で、水泳の時間は少ないと思う	.261	-.120	.037	-.075	.090
2	指導要領の内容に沿った授業を行っている	-.048	.836	.044	.102	.714
3	限られた授業数で各学年の指導要領の内容・目標に沿って教えている	.046	.658	.111	.119	.462
4	4学年以上から、ある程度続けて泳ぐ能力が求められているが、必要であると思う	.068	.067	.483	.121	.257
5	指導要領には「第4学年 クロール・平泳ぎの技能を身につけ、ある程度続けて泳ぐことができるようになる」とあるが、児童全員が達成できると思う	.936	.080	-.037	.182	.917
6	指導要領には「第5, 6学年 クロール・平泳ぎの技能を身につけ、ある程度続けて泳ぐことができるようになる」とあるが、児童全員が達成できると思う	.910	.143	.056	.119	.866
7	指導要領には「クロール・平泳ぎの際にスタートも取り上げる」とあるが、必要であると思う	.334	.040	.511	-.147	.396
8	指導要領には「クロール・平泳ぎの際にスタートも取り上げる」とあり、必ず取り入れている	.389	-.009	.265	.030	.223
9	児童は自分の能力を理解できると思う	.004	.014	.232	.514	.318
10	水泳においては、課題解決のための練習の工夫を工夫することは必要であると思う	-.048	.049	.574	.192	.371
11	児童は自分の能力に合った課題を決め、練習に取り組むことができると思う	-.035	.081	.136	.633	.427
12	着衣泳は、各学校の実態に応じて取り扱うとあるが必ず取り入れている	.066	.078	-.039	.238	.069
2乗和		2.052	1.195	0.988	0.873	3.019
寄与率		0.171	0.100	0.082	0.073	0.252

※ □で囲んであるものは、絶対値が0.35以上のものである

下位尺度名	該当項目
児童の目標達成の見通し	5, 6, 8
指導要領に基づいた指導実施	2, 3
児童の技能獲得の必要性	4, 7, 10
児童による自身の理解	9, 11

表2-2 水泳指導について

番号	内 容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
13	水泳事業において、自分の指導力に自信がある	.074	.708	.111	.120	.090
14	水泳授業をできればやりたくない	-.053	-.464	.033	.220	-.320
15	児童の大半は水泳授業が好きであると思う	.904	.073	.039	.050	.050
16	児童の大半は水泳授業を楽しみにしていると思う	-.700	-.031	-.108	.046	-.210
17	児童の大半は水泳授業を嫌がっていると思う	.697	.067	.126	.035	-.010
18	児童の大半は水泳授業を怖いと感じていると思う	-.273	-.085	-.471	.219	.030
19	児童の水泳技能向上を評価することは必要である	.059	.102	.217	-.120	.060
20	水泳授業の際、安全面には特に気を遣っている	.041	-.067	.382	.112	-.110
21	水泳授業には必ず児童と一緒にプールに入って指導する	.106	.066	-.039	-.014	.400
22	児童と一緒にプールに入る指導より、プールサイドでの監視の方が重要だと思う	.050	.082	-.011	.687	.001
23	自分一人で教える場合の児童数は少人数のほうがよい	-.082	-.230	.574	.172	.500
24	自分一人で教える場合の児童数は多くても可能である	.030	.497	-.055	.032	-.060
2乗和		1.902	1.060	0.791	0.646	0.587
寄与率		0.159	0.088	0.066	0.054	0.049

※ □で囲んであるものは、絶対値が0.35以上のものである

下位尺度名	該当項目
児童の水泳に対する態度の理解	15, 16, 17
水泳指導への自信	13, 14, 24
安全性の重要視	18, 20, 23
監視の重要視	22
少人数での個別指導重視	21, 23

表2-3 水泳指導の行い方について

番号	内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
25	学校体育での教育できる水泳には限界があると思う	-.007	-.123	-.525	.014	.154	.315
26	学校の授業で十分に水泳の能力を身につけられる	-.067	-.074	.753	-.033	.139	.593
27	スイミングスクールの指導法を参考にしている	.022	.056	-.011	.830	.063	.696
28	自分が学生のときの水泳指導を参考にしている	.245	.073	-.013	-.006	-.011	.006
29	水泳技能を向上させるための練習は必要ない	.002	-.507	.052	.151	.011	.283
30	水泳授業でよりよい練習方法を工夫している	-.023	.454	.146	.185	-.084	.269
31	水泳授業で児童から意見があれば反映させている	.312	.427	-.024	.073	.109	.200
32	児童の能力別に指導を行っている	.063	.129	-.025	-.027	-.369	.154
33	水泳授業において練習計画や目標を定めて行っている	.034	.511	.037	.110	-.300	.365
34	学校のプールだけでなく、公共のプールの活用も必要だと思う	.753	-.139	.023	.040	-.032	.022
35	学校での水泳授業の他に、スイミングスクールに通った方がよいと思う	.265	.034	-.162	.275	.217	.150
36	学校の水泳授業で、スイミングスクールと協力し、連携することは可能であると思う	.435	.130	-.156	.180	.535	.360
2乗和		0.995	0.990	0.921	0.875	0.627	1.437
寄与率		0.083	0.082	0.077	0.073	0.052	0.120

※ □で囲んであるものは、絶対値が0.35以上のものである

下位尺度名	該当項目
社会体育との連携	34, 36
指導法の工夫	29, 30, 31, 33
学校体育の指導の限界	25, 26
スイミングスクールの指導法を参考	27
スイミングスクールとの連携	32, 36

表3 施設・設備の比較

	メインプール (長さ = m)		コース数	更衣室 (%)	
	屋内 (%)	屋外 (%)			
スイミングスクール	25 (100)		3 - 7	100	
小学校	25 (9.1)	25 (90.9)	5 - 8	72.7	
	目洗い場 (%)	シャワー		男女別トイレ (%)	監視塔・監視台 (%)
		温水 (%)	冷水 (%)		
	100	100		100	42.9
	100		100	63.3	72.7
	救急箱 (%)	ビート板 (%)	ヘルパー (%)	浮き具 (%)	救助用具 (%)
	85.7	100	100	100	71.4
	63.6	100	72.7	36.4	36.4

※ %はスイミングスクール、小学校それぞれの中で、施設・設備を保有している割合を示す

表4 対象児童の学年と性別

	男	女	合計
4年生	356	297	653
5年生	363	317	680
6年生	354	350	704
合計	1073	964	2037

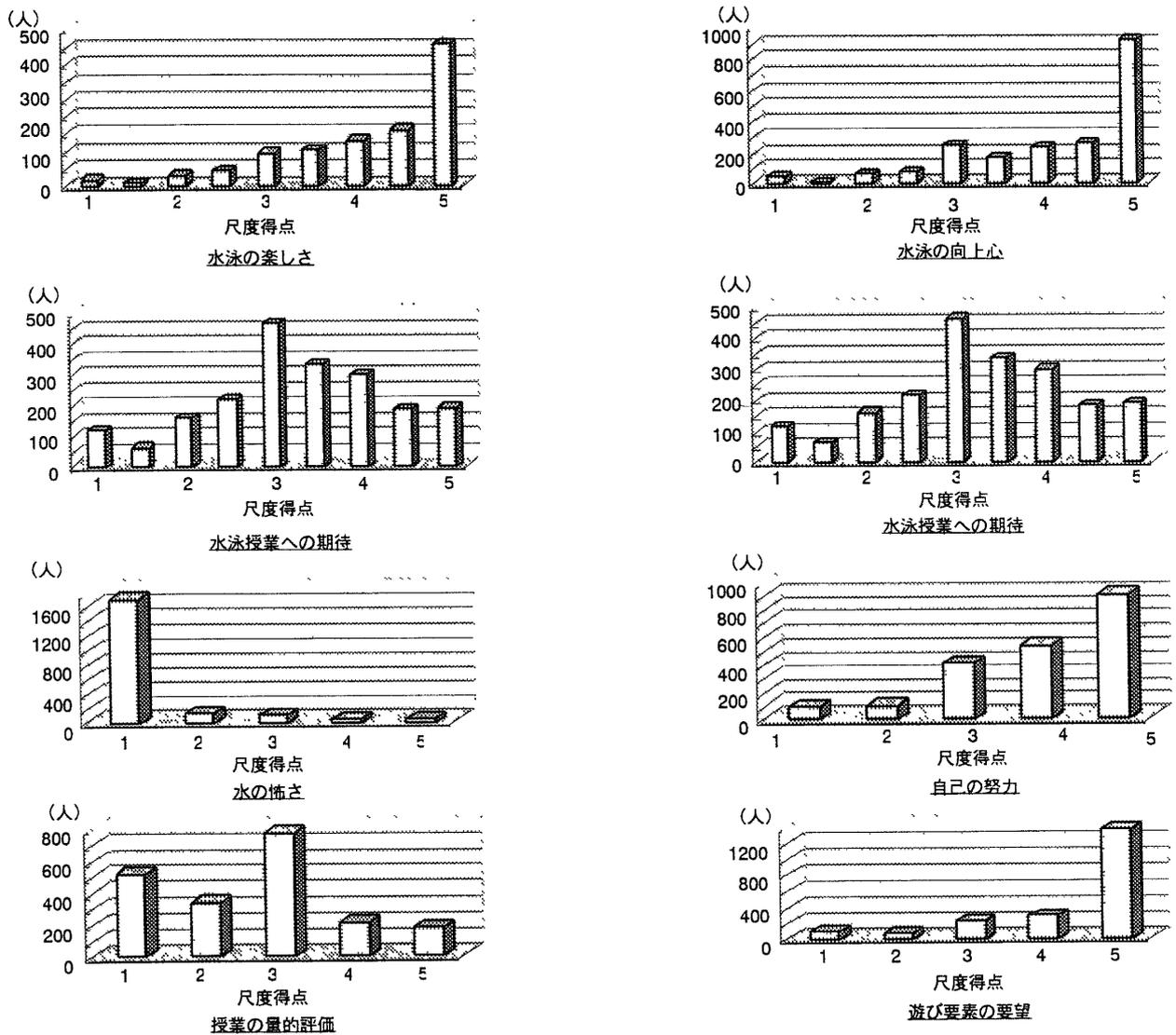


図1 児童調査への回答

他の尺度については有意差がみられなかった。学校体育が一定の成果をねらいとしてなされるわけであるが、学年を経るにつれて児童の水泳や水泳授業に対する積極的な態度が減少傾向にあることは、遺憾なことである。

性別での比較では、水泳への向上心が男子よりも女子において高かったほかには有意な違いはみられなかった。今回は学年と性別の交互作用については検討していないが、第2次性徴や心理的な発達段階などを考慮すれば、この点はさらに検討すべき余地があるといえよう。

最後に、スイミングスクールの経験もしくは今後の参加意図から、調査対象者を「現在通っている(現在)」「今後通うつもりである(今後)」「過去に通っていた(過去)」「通った経験がなく、今後も通うつもりはない(なし)」の4群に分け、一要因分散分

析を行った。結果はおおまかに、「現在」「今後」「過去」「なし」の順に積極的な態度が見られた。この中で興味深い結果は、水泳授業に対する期待で見られた。他の群と比較して、「現在」群が多重比較の結果、有意に低い期待を示したのである。有意ではないものの最も高い期待を示したのは「今後」群である。また、こちらも有意ではないものの、水泳時間の楽しさを最も感じていたのも「今後」群であった。

「現在」群は水泳を学ぶ場として、スイミングスクールの場面も持っている児童である。彼、あるいは彼女たちにとっては、スイミングスクールの方が水泳の上達にはふさわしく、また授業における内容に満足できないところがある、ということを示しているものと思われる。「今後」群は未だスイミングスクールでの経験がないものの、体育授業の中で水泳の楽しさや技能向上があり、水泳への興味・関心が

表5 分散分析のまとめ

※ 上段が平均, 下段が標準偏差

	(N)	水泳の 楽しさ	水泳の 向上心	授業への 期待	水泳時間の 楽しさ	水への怖れ	自己の努力	授業の 量的評価	遊び要素の 要求	
学 年	4年生 (653)	4.23 .998	4.20 1.076	3.30 1.150	3.99 1.043	1.37 .930	4.18 1.119	2.64 1.358	4.33 1.164	
	5年生 (680)	4.12 .983	4.18 1.011	3.34 .981	3.96 .977	1.34 .873	3.98 1.117	2.61 1.164	4.32 1.066	
	6年生 (704)	4.04 1.012	4.06 1.021	3.14 1.015	3.64 1.115	1.28 .799	3.89 1.109	2.58 1.151	4.34 1.096	
	p	< .01	< .05	< .01	< .01	n. s.	< .01	n. s.	n. s.	
	性 別	男子 (1073)	4.10 1.057	4.04 1.102	3.23 1.117	3.87 1.089	1.32 .894	3.98 1.175	2.57 1.293	4.30 1.174
		女子 (964)	4.16 .932	4.26 .946	3.29 .974	3.85 1.026	1.39 .838	4.04 1.056	2.65 1.144	4.39 1.028
p		n. s.	< .01	n. s.						
ス ク ー ル 経 験		現在通っている (282)	4.55 .816	4.45 .931	3.05 1.156	4.12 1.024	1.15 .621	4.22 1.098	2.43 1.319	3.96 1.409
	今後通いたい (94)	4.48 .855	4.51 .970	3.44 1.122	4.29 .898	1.27 .721	4.38 .963	2.48 1.374	4.38 1.156	
	過去に通っていた (672)	4.22 .941	4.09 1.038	3.27 1.083	3.90 1.063	1.25 .813	4.02 1.113	2.64 1.213	4.34 1.106	
	経験も意志もない (989)	3.91 1.042	4.06 1.048	3.29 .985	3.72 1.055	1.44 .958	3.91 1.131	2.65 1.187	4.45 .977	
	p	< .01	< .01	< .01	< .01	< .01	< .01	< .05	< .01	

高まったことで、スイミングスクールへの参加を考えている児童と読み取ることができるであろう。おそらく、このあたりが学校体育における水泳授業の厳しい現実を示しているものと考えられる。

また、全体の33%にあたる児童が、過去になんらかの形でスイミングスクールやスイミングクラブを経験している。この「過去」群の特徴としては、平均として、水泳に対する態度は「現在」群より、「なし」群に近いものである。「今後」群と比較すると、「今後」群のほうがより積極的な態度を示していることにも気づくべきであろう。泳力を比較すると高いほうから「現在」「過去」「今後」「なし」の順となる(図2)。つまり、「過去」群の中には泳力はあるが、水泳に対しては消極的な者が存在する可能性があるということである。「過去」群の中には、短期のコース体験者から、選手育成コースに所属していた者までさまざまな者が混在しており、また継続していない原因も本人に起因すること以外にも多くの要因が考えられるため、性急な判断はできないが、この点も今後検討を加えていく必要があると考えられる。

水泳授業に対する教員の考え

教員に対する調査の結果をまとめたものが図3である。

学習指導要領との関連では、指導要領に基づいた指導を行い、児童の目標達成の見通しも立っている、ということに関しては、それぞれの平均が3.20, 3.57と誤差よりは幾分よいという値に留まっている。また、児童自身が自らの技能や能力を理解しながらの学習を進めるにはいささか困難であるというデータが示されている。水泳指導に対する考えでは、少人数での個別指導が重視されているながら、監視の重要性も認め、安全性に多大な配慮をしなければならない状況となっていることが伺える。体育授業において教員が多くの児童を担当していることを考えると、個別でのいいねいな指導は容易には実現できないであろう。また、教員自身が水泳指導に対して、幾分自信を喪失しつつある状況も伺い知ることができる。

そして、実際の水泳指導に際して留意していることや望むこととしては、最も高い得点となったのが、指導の工夫である。かならずしも整っていない条件のもとで、いかに安全かつ効率的に、また児童

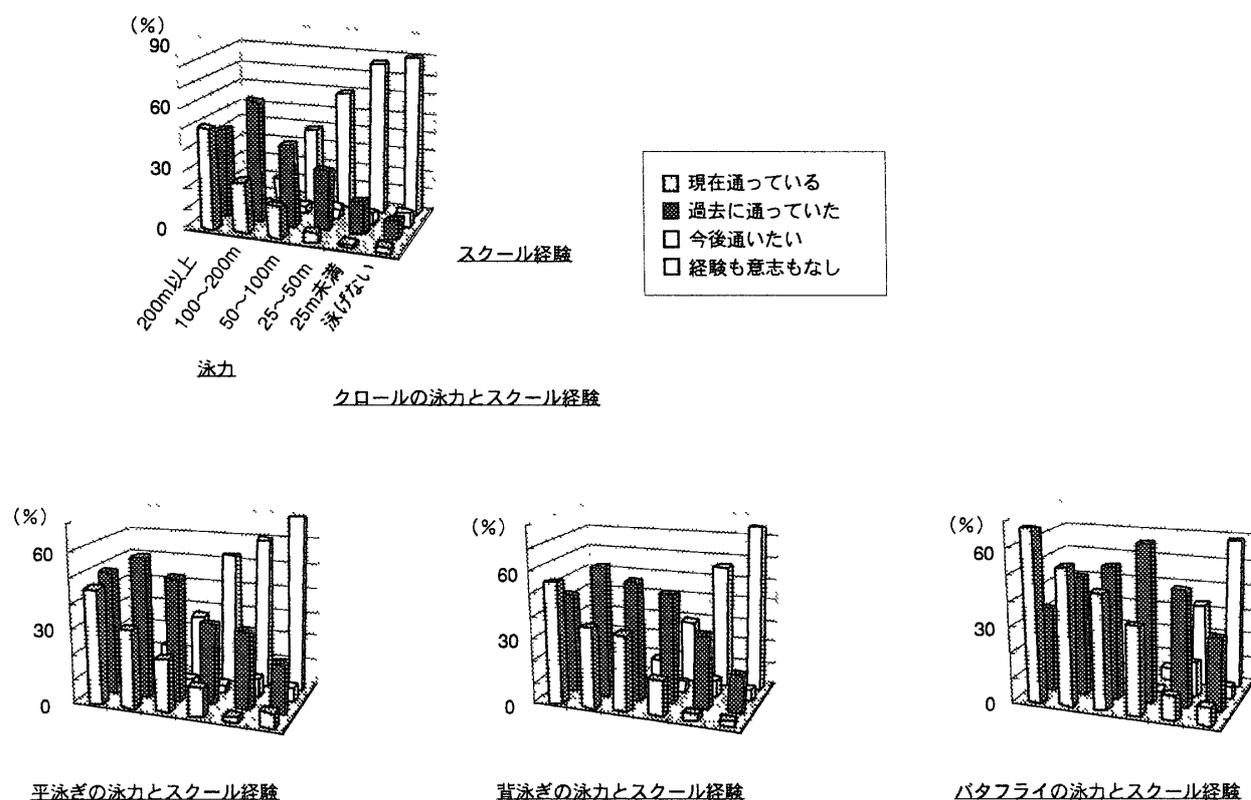


図2 泳力とスクール経験との関連

の琴線に触れる授業ができるのか、教育のプロとしての、教員の腕の見せ所でもある。しかしその一方で、社会体育やスイミングスクールとの連携に対して前向きな考え方も示されている。学校体育における指導者や施設問題については根本的な解決も望まれているということであろう。

また、自由記述の中には

- ・プール管理の経済性や労力を考えると、学校外施設の利用が望ましい。
- ・泳力よりも水慣れの段階での丁寧な指導や、護身のための技能の習得などを期待したい。
- ・学校に社会体育指導者を派遣してもらうことも一つの方法ではないか。
- ・天候に左右されずにできることが望ましい。
- ・現在の学校体育における、少数の指導者に多数の児童・生徒、加えて限られた時数のなかで泳力の向上を図ることは非常に困難である。
- ・泳力の向上は社会体育で行い、学校体育では着衣泳などの生活の中での水への対応を重視すべきではないか。
- ・児童の評価を考えると、全面的に連携することは考えにくい。
- ・学校外に出て行く時間が取れないであろう。
- ・社会スポーツ施設では、多数の児童を受け入れる

スペースがないのではないか。

等の忌憚のない、貴重な意見が多数あった。特に多かった3つの意見は

- ・指導者の増員を希望する。
 - ・教員が指導法を専門家から学ぶ機会を希望する。
 - ・学校体育で泳力をつけることは無理ではないか。
- というものであった。本研究者らがこの研究を構想した際に予想したことがまさに学校体育の現場で起こっていることが改めて確認できたといえよう。本研究者らは、その打開策として、社会スポーツ、特にスイミングスクールとの連携を考えた。連携に対しては、積極・消極の両意見が教員から得られたが、現状がけっして望ましい状態ではないことは、誰の目にも明らかであろう。打開策の一つとしてのスイミングスクールとの連携は、多くの解決すべき問題はあるが、十分に検討の余地のあるものであることが教員への調査からも示されたといえよう。

学校体育との連携に関するスイミングスクールの考え

(1) 各スイミングスクールのプログラム内容(表6)

表6に見られるように、各スクールともに多様なコース展開を行っている。先にも述べたが、競技水泳の強化のためのスイミングクラブが、スクールとして活動していることを結果は明確に示している。

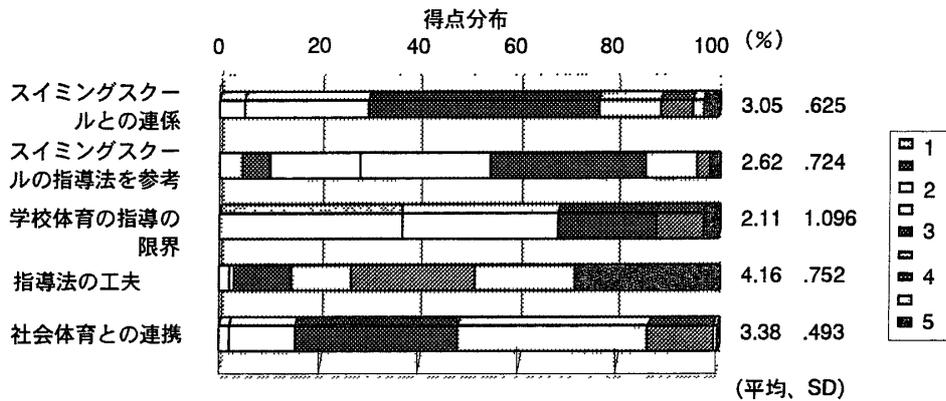
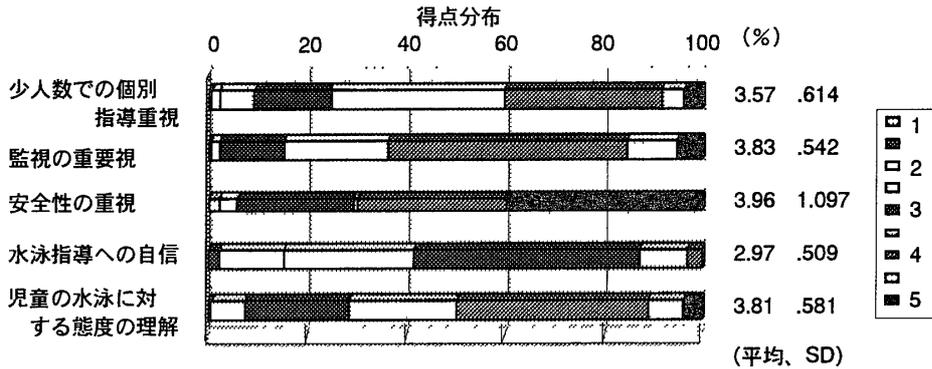
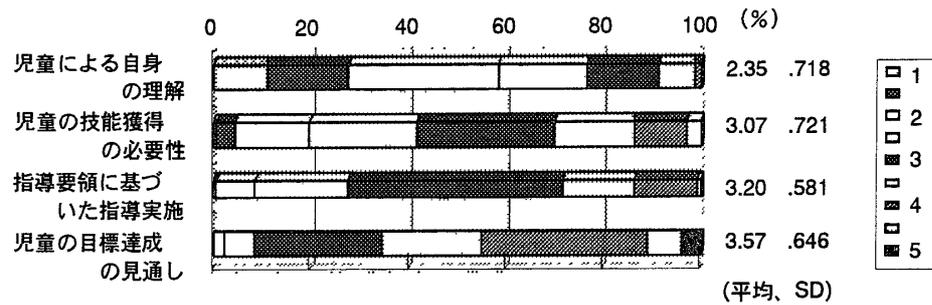


図3 教員調査への回答

表6 各スイミングスクールのプログラム内容

スイミングスクール別	成人初心者指導(各種泳法)	成人中級・上級者指導(各種泳法)	水中体操 シェイプ アップエク ササイズ等	水中歩行水 中ジョギン グ水中ボク シング	ヘルス (高齢者 向け)	マタニティ	ベビー スイム	幼児スイム	フリー スイム
a	○	○	○	○	○	—	○	○	○
b	○	—	○	○	—	—	—	—	—
c	○	—	○	○	○	○	—	—	○
d	○	—	○	—	—	—	○	○	—
e	—	—	—	—	—	—	—	—	—
f	○	○	○	○	—	—	—	—	○
g	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※ 学校の授業時間帯に限る。

※ eスクールについては、回答ならびに資料なし

(2) 他団体への貸し出し状況

プールを他の団体に貸し出しているところは、7プールの中で2ヶ所であった。ただし、貸し出し先は1つは幼稚園、1つは大学であり、小・中学校を対象に貸し出しを行っているところはなかった。

(3) 学校体育に対しての協力要請があった場合の対応について

学校からの協力要請があった場合に現段階で協力できるとしたプールは7プール中1ヶ所、協力を検討する準備のあるところが5ヶ所、協力が困難であるとするところが1ヶ所、協力の意志がないとするところは0ヶ所であった。

(4) 貸し出し可能な時間帯

貸し出しのできる時間帯については、ほぼどの時間帯でも大丈夫とするところが1ヶ所、スポット的に可能であるところが4ヶ所、現状では実際にはどの時間帯も困難であるところが2ヶ所であった。先にもあったように、各スクールはそれぞれの経営方針によって活動をしているため、現在のプログラムの変更等を行わなければ、連携は困難であると考えられる。

(5) 連携に関する自由記述より

- ・学校のプールを廃止して、民間のプールを利用すべきではないか？依頼があれば、プログラム編成の変更も含めて積極的に考えたい (cスクール)。
- ・将来は、体育授業の水泳を民間などの学校外の施設で行う形が増えていくであろう。民間のスイミングスクール等では比較的柔軟な対応ができると思われるが、公的施設の場合は指導者の確保がポイントとなるであろう (dスクール)。

このように、積極的な意見が示され、民間スイミングスクール側も、条件を整えれば、学校体育との連携を実現できる可能性が十分にあることが示された。

まとめ

本研究では、小学校の水泳授業を社会スポーツ施設、特にスイミングスクールとの連携のもとで実施していくことについて、小学校とスイミングスクールとの施設・設備の比較、児童の水泳、水泳授業に対する考え、教員の水泳授業に対する考え、連携についてのスイミングスクールの考えなどから、その実現の可能性を探った。

施設・設備としては、年間を通じて水泳を行うことのできるスイミングスクールの有効性が示された

が、概して小学校のプールの方でコース数が多く、気候・天候の条件さえ整えば、利用が集中しがちな夏期においては非常に有効な場を提供することができる。このことは社会スポーツの実施者に学校プールを解放するかたちでの連携を模索することも可能にするであろう。ただし、このためには学校のプールが一般利用者の使用に耐えうるものでなければならず、更衣室、トイレ、温水シャワー等の整備などに加え、プールの水深なども検討すべきことがらとなってくるであろう。

児童の水泳、水泳授業に対する考えからは、現在スイミングスクールに通っている児童にとっては、体育での水泳授業はやや物足りないものとなっているようである。しかし、学校体育で水泳の魅力を知った者がスイミングスクールに通うことを意図するようになってきていることもわかった。両者が互いに協力しあい、役割を分担しながら連携していくことで、子どもたちの多様なニーズと生涯スポーツの基礎の部分の学習がよりすすめられるのではないであろうか。

これに対して、教員の水泳授業に対する考えからは、今すぐに学校外の場で児童の学習が進められることには、ソフト・ハード両面からの困難さが存在することが伺えた。しかし、アイデアとしては多くの教員の方々から賛成していただくことができたように思う。実際の運用に際してのさまざまな障害が現れてくることが予想されるが、まずは問題となる点を洗い出し、新たな体育の実現を図ることができればよいと考える。

最後に、スイミングスクール側に対して、学校体育との連携について行った調査からは、スイミングスクール側は比較的前向きに連携の可能性を考慮している様子が把握できた。多くのスクールが現在、それぞれの方針のもとに多様な展開を図っているため、現段階で学校体育をすぐに受け入れることは困難であるものの、一定の準備を整えばこのことは十分に可能であると考えられる。

連携を実現するためには、実際には学校側での法律や制度の整備、学校内外の関係者での組織づくりといった点も解決されなければならない、また経費的な問題も生じてくることが予想される。

また、現段階では、学校体育での水泳授業が学校外で行われることがシステムとしてなされているわけではないため、公共の水泳施設には管理者はいても、指導者がいないという現状がある。しかし、今後学校体育が学校外の施設と積極的に連携していく

ことがシステムとして実現されるようになれば、公共の水泳施設の時間帯別の貸し出し、ならびに指導者の雇用という点も新たな展開がなされることも考えられよう。

以上のように、本研究は学校体育における児童の現状、教員の現状、社会スポーツとしてのスイミングスクールの現状などから、学校体育とスイミングスクールの連携の可能性について探った。多くの有効性が見いだされたとともに、いくつかの解決すべき問題があることも示唆された。しかし、多くの問題は実現において致命的な問題ではないように考えられる。本研究者らには、それらは実施にあたっての準備、整備が必要であるというレベルのものであると考えられる。この後、見いだされた可能性を実現するためにはプランとアクションを組み合わせ

て、問題の解決にあたる必要があるであろう。

本研究は、平成14年度新潟大学教育人間科学部卒業論文（提出者：跡治望美）の内容を再検討し、データの再分析等も行って執筆されたものである。

参考文献

- 社団法人日本スイミングクラブ協会（2000）アクアフィットネスインストラクター指導教本
- 文部省（1996）文部科学統計要覧・文部統計要覧
- 文部省（1998a）小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局
- 文部省（1998b）中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局
- 文部省（1999）高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局
- 文部科学省（2003）文部科学統計要覧・文部統計要覧